

ね の か み
子ノ神遺跡出土

い え が た ど き
家形土器

この家形土器は子ノ神遺跡の第 112 号住居址から出土したもので、弥生時代後期に作られたものと考えられます。発見当時は小片でしたが復元作業により現在の形となりました。

家の形は切妻造で脚台が付いています。総高は 39.0cm、床から棟までの高さは 23.5cm です。

屋根は逆台形状の切妻で、棟は上から見るとゴンドラ形の船を載せたような形になっています。棟木が突き出ており、先端には小さい孔があげられています。その上には、上方に突き出る角状の表現がありますが、折れているためにどんな形をしていたのかははっきりとしません。棟の中央に 8.3×6.7cm の開口部があります。この口は明らかに土器を焼く前にあけられており、後から故意にあげられたものではないようです。

屋根と棟飾りの外面には、櫛描波状文が施されています。壁は平側には何の表現もありませんが、妻側には突帯で梁を表し、その上下には三角文が描かれています。また、器面が荒れ判然としない部分もありますが、外面全体に赤色顔料が塗られた痕跡が認められます。

脚部は高さ 10.5cm で「八」の字状に開き、下端部が歪んでいます。外面には家形部同様、全体に赤色顔料が塗られた痕跡が認められます。

家形部は袋状になっており、棟にあいた口から何かを注ぎ込む容器として使われていたものと考えられます。

この家形土器は弥生時代の家の構造が、平面的な表現ではなく立体的に表現され、当時の家の様子がよく分ります。また、その形が脚を付けた倉を表したものとも考えられ、米が貯蔵される米蔵のシンボルとして種籾の容器に用いられたことも推測されます。集落内の一住居から出土したことから、共同体が所有する重要なものであったものと考えられます。

家形土器は全国的にも非常に出土例が少なく、今までに類例が 9 例しか確認されていない珍しい土器ですが、静岡県浜松市の鳥居松遺跡からは、子ノ神遺跡の家形土器とよく似た家形土器が発見されています

